

最近在日本出版中国関連書籍報告（2005.8）

藤 田 昌 志

关于最近在日本出版的中国书籍

《提纲》

2005年4月末，在中国，“反日风暴”“狂风大作”。日本媒介全都报道“反日风暴”而发表歪曲的看法。中国是真的那么讨厌日本吗？如果是的，那么，这个原因到底在哪儿？为什么“反日风暴”在中国“狂风大作”呢？本报告考虑这些问题，通过最近在日本出版的关于中国的书籍，就有关问题进行了研究。有些人用一个偏颇的视点来看中国，批判中国。有的人看准日中两国的现在和未来，用长远的眼光，本着客观的，双赢的原则，提出一些宝贵的意见。我想通过现在在日本出版的容易得到的书籍就这些问题进行探讨。

キーワード：「反日」，インターネット，親民性，日本映画週間，大平学校

一、序

2005年の4月末は「反日の嵐」が「吹き荒れた」。日本のマスコミはこぞって、いかに中国で中国人が日本人を嫌い、憎んでいるかを報道し続けた。それも同じ映像を何度も何度も流して…。印象に残った映像には次のようなものがあった。

上海で日本車に乗っている若い中国人女性の車が「反日」のターゲットになり、若い中国人男性がその女性の車（日本車）のボンネットに上がって、何度も飛びはねる。女性は涙ながらに「やめて!」と何度も叫ぶが若者は飛びはね続ける。又、こういうものもあった。日本料理店のドアに若い男性が石を投げつけ、ドアを蹴りつけ体当たりする。日本人のほとんどがこうした映像を何度も見せられることによって、中国の「反日」運動に眉を^{ひそ}め、「異種」「変」「遅れている」などといったイメージを醸成することになったのではないか。本当に中国は「反日」なのか、中国は日本が嫌いなのか、嫌いならその理由は何か、こうしたことを考えることなしに日中の将来はないであろう。本報告ではそうしたことに鑑みて最近、日本で出版された中国関連の書籍、それも一般に入手しやすい文庫本などを通して日中間の現状、将来について考察してみたいと思う。

二、古森義久、杉山^{かつみ}徹宗、金文学等各氏の本について

古森^{こもりよしひさ}義久 (2003) 『日中再考』扶桑社文庫は著者が産経新聞での連載をまとめる形で単行本にして出版した 2001 年 6 月のものをベースにして文庫本化したものである。古森 (2003) は文庫版のためのあとがきで言う。「中国との交流はもちろん日本にとって欠かせない。だがその交流は「友好」とか「贖罪」という呪文に縛られることなく、中国の光と影、明と暗、実と虚をしっかりとみすえて進めねばならない。日本側にとっての実利を計算しての複合的で現実的な姿勢でなければならない。でなければ、日本側がひどい苦痛や損害を受けることにもなる。」以上のことが単行本で述べたかった最大の主張であるとともに、「今回の文庫版でも改めて力をこめて」主張したいことであるとのことである。「友好」や「贖罪」が何故「呪文」なのかよくわからないし、それがないと「日本側がひどい苦痛や損害を受けることに」なるという「日本側にとっての実利を計算しての複合的で現実的な姿勢」というのもよくわからない。次に本書の内容を検討して見ることにする。

本書は第一部 似て非なる隣人、第二部 友好の虚実、第三部 歴史の考え方、と三部構成になっている。第一部 似て非なる隣人の 2 は「中国人は一般的に日本人が大嫌い」という題目である。

古森氏のその論が奇妙である。北京在住のアメリカやヨーロッパの友人知人から中国人は日本人を嫌っているから、「日本人が中国で暮らしていると、特別な苦労が多いでしょう?」とよく問われると言う。「小日本」「日本鬼子」「倭猪」(野蛮なブタ野郎) という^の罵り語が存在するから中国が日本を嫌っているとは言えないが、中国で日本人は「いわば悪役のような存在」だと言う。もっとも古森氏は「とくに日本人だからという理由で傷ついた記憶もない」と言う。又、1985 年に中央テレビが放映した『おしん』(阿信) は放映時間に北京の町が「万街空巷」(街がすべてからっぽ) になるほどの人気だったし、1982 年に放映された『姿三四郎』を見て日本留学を決意した者もいるし、高倉健、山口百恵、中野良子、三浦友和は (1978 年の日本映画週間の影響で) 人気が高い。「しかし」「いま現在の中国人の日本観となると、やはり全体としてのネガティブ、つまり日本嫌いの傾向が顕著だ、と報告せざるをえない」と古森氏は言う。アメリカの中国研究者アレン・ホワイティング氏の (2000) 『中国人の日本観』の序文にある「中国の日本に対する一般的な認識は依然、敵対的であり、(最近) は八〇年代なかばよりもその度合いが強い」という言辭を援用し、又、インターネットに「日本人はもっとも恥知らずの民族だ」と恒常的に記されることが、自身の「産経新聞の初代の中国総局長」としての印象をその根拠とする。そして「現実を直視することなしには、日中両国の健全な関係を築くことは不可能」であると言う。

古森氏は一体、何が言いたいのだろうか。「はしがき」で言う。「この書では、一般的な常識でみた日中関係のどこがどれほど異様なのか、できるだけ実証的、客観的に報告することを試みた。」つまり古森氏が述べたいのは日中関係の「異様」さであり、その「異様」さを「実証的、客観的」に報告することが本書の目的なのである。古森氏は日中関係、又、中国の「異様」さに興味があるらしいが、では「正常」で健全な国とはどこかと言うとどうやらアメリカらしい。アメリカは「民主主義」と「軍事動向」という二大要因を以て中国に対しては、日本にはそれが欠如している⁽¹⁾、古森氏にはそれが不満らしい。

第一部 似て非なる隣人 で述べられる日中関係及び中国の「異様」さ、「異質」性にはこの他、次のようなものがある。「交通ルールの無視」や「店員の粗野な対応」⁽²⁾、「友好」の乱発による現実の目隠し⁽³⁾、過去の日本の戦争行為を糾弾する言論の休みなしの継続キャンペーン⁽⁴⁾等々である。いずれも暗部のみを見ようとする視点から発せられている言辞である。

第二部 友好の虚実 では、1963年に誕生した中日友好協会は中国共産党により組織されているから、「民間友好」はできない⁽⁵⁾、24「日本側の善意は中国人には伝わらない」⁽⁶⁾ こと等が述べられている。

第三部 歴史の教え方 では中国の歴史教育が「日本の侵略」を誇張して取り上げている⁽⁷⁾として、抗日教育＝反日教育という視点で中国の歴史教育を批判している。

古森氏は一体、何が言いたいのだろうか。つまりは「中国共産党独裁」の中国という国が気に入らないのである。第三部で述べられている抗日教育＝反日教育（2005年4月～8月のマスコミ報道の視点も同じ）自体まちがいである。抗日教育は中国共産党の成果を誇るものであり、中国は一貫して日本軍国主義者と日本人民を峻別し、後者は中国人民と同じく戦争の犠牲者であり、友好を結ぶべき相手として対応してきた。古森氏は中国語を全く解しない。氏の視点には「自由」「民主」という西欧的な視点からのものが濃厚に感じられ、氏の書くものは中国を一段、低いもの、「異質」なものとして見る視点、その視点からの発言に満ちている。

同氏による（2005）『北京報道七〇〇〇日 なぜ日中再考なのか』扶桑社文庫は2000年にPHP研究所より発行された単行本を文庫化したものであるが、日本とは「異質」な中国という視点で「報道環境の特異性」を説明することを主眼として書かれたもの⁽⁸⁾である。

「報道環境の特異性」とは具体的には、「中国当局」が「在中国の外国記者の報道ぶりに他の国の政府にくらべれば異様としかいえないほど徹底した注意を払う」⁽⁹⁾ことや「一党独裁」⁽¹⁰⁾の中国の現状とその「威嚇」と「恫喝」⁽¹¹⁾、「中国側が触れられることを嫌が

るテーマはほとんど取りあげない」⁽¹²⁾ NHK の存在等々である。

要するに古森氏には中国人の持つ“面子”の重さや中国人の歴史、文化、政治観への理解は全く存在しない。アメリカ的な視点からの断罪的、高踏的な視点しかない。ベースにあるのは「報道の自由」「民主」を基本とするアメリカ的な価値観であり、それを中国にあてはめ、断罪しているだけである。少なくとも歴史的な視点から将来の両国の関係を見据えて、よりよい関係を作っていこうとする志向性は存在しないように思える。所属する新聞社の方針への迎合とも考えられる言辞でもある。

以上、紹介した二冊は何かと物議をかもし出している出版社から出版されていることも銘記しておきたい。

杉山徹宗^{かつみ}（H.16）『侵略と殺戮 真実の中国 4000 年史』祥伝社黄金文庫は、「中国がその四〇〇〇年の歴史において行ってきた異民族に対する侵略や殺戮、一方国内においても、王朝の交替ごとに繰り返された何千万人単位の大虐殺といった、残忍で非人間的としかいえないような、いわば中国史の「陰」の部分、を、あえて白日のもとにさらすことを試みるもの」⁽¹³⁾である。著者の著書の内容要約自体に異様なものを感じる書籍である。この本は平成 11 年 4 月祥伝社ノン・ブックから刊行された『中国 4000 年の真実』を改題したものである。

杉山氏は一貫して中国史の「陰」の部分に注目する。曰く、中国では王朝交替期に数千万人も人口が大激減する⁽¹⁴⁾、太平天国の乱の際に 1 億 3,500 万人が殺戮によって命を落とした⁽¹⁵⁾、中国が反日教育を若者に施すのは共産党の政策の失敗を隠し、国民の不平・不満の目を政府に向けさせず、日本に振り向けさせるための逃げ道である⁽¹⁶⁾等々。一番目と二番目についてはだからどうだと言うのか。その一事をもって中国人が残忍だと言うのだろうか。日本の江戸時代の拷問は残忍ではなかったのか。三番目についてはよく聞く中国批判であるが、既に述べたように中国は日本軍国主義者と一般日本人民を峻別しているのであり、日本首相の靖国参拝を批判するのも侵略戦争賛美に繋がることを懸念してのことである。又、「抗日」と「反日」は全く別物で、中国が「抗日」戦争の歴史をテレビでよく放映するのは、中国共産党が「抗日」戦争に勝利して現在の中国を作ってきた歴史を確認する作業であり、中国人が日本人を憎み続けていることの根拠とすることはできない。「反日」は日本企業の利益地元還元の努力のなさ、中国人の日系企業で働く中国人（普通の中国人の 2～5 倍の給料を得る）への嫉妬心、経済発展の中で取り残されるのではないかという中国人の焦躁感等によって引き起こされたものである。

それにしても杉山氏は何故、これほどまでに中国を毛嫌いするのであろうか。中国が米

を解く鍵があるようである。

「米国は中国的視点からすれば確かに覇権国家であろう。だが、米国は少なくとも人類が求めて止まない自由・平等・民主・人権のスローガンを掲げ、そのために米国民や経済を犠牲にしてでも、警察官的役割を買って出ている国である。そのためには、単に軍事力だけでなく、莫大な人的資源と経済的資源を国際社会のために費やしている。」⁽¹⁷⁾ 要するに杉山氏はその経歴からも明らかなように（米国州立ウイスコンシン大学修士課程修了、カリフォルニア州立大学講師）アメリカ寄りの、アメリカの立場から中国を断罪しているのである。既述の古森氏もワシントン大学留学、ワシントン特派員（毎日新聞社）、ワシントン駐在編集特別委員兼論説委員（産経新聞社）という経歴からアメリカの視点から中国を裁いているのである。古森氏、杉山氏両氏に共通するのは、中国を「異質」な国家と見なし、仮想敵としていることである。そこにあるのは「連続」の思想ではなく「断続」の思想であり、古い、20世紀の冷戦時代のそれに繋がる思想であろう。

金文学（H.17）『中国人民に告ぐ!』祥伝社文庫は在日韓国系中国人（本書の帯にそう書いてある）である著者による異常なまでの中国批判のオンパレードの書である。曰く、公衆秩序意識と礼儀のない中国人⁽¹⁸⁾、中華思想⁽¹⁹⁾、サービス意識の欠如⁽²⁰⁾、中国人の深層にある反文化志向⁽²¹⁾、“内訌”（中国人の集団内部で起こる紛争）⁽²²⁾ 等等。金文学氏は、中国人を憎悪しているようである。

以上、見てきた4冊に共通しているのは日中間の将来について何ら建設的な意見を述べていないことである。相互理解のためには相手の現状認識が必要だというなら、悪い面と同様に中国の現状の良い面も見るべきであろう。

私は中国で非常に親切な中国の人にも会ったし、立派な人格、風格を持つ人にも会ったことがある。人格、風格のある中国の人に会うと中国の悠久の歴史と文化を肌で感じる思いがする。粗探しと見下した視点で対する中には日中間の将来はない。以上の4冊からそのことを痛感する。

三、莫邦富氏の本について

莫邦富氏（2005）『日中はなぜわかり合えないのか』平凡社新書は上海生まれの知日派ジャーナリストによる著作である。莫邦富氏は「はじめに」で「日中間に存在している問題は、いまの日本の政治家や一部の日本人（といってもかなりの多数と見ていいだろう）が中国国民の気持ちを理解しようとしていないことにある。」⁽²³⁾ と言う。といって莫邦富氏は日本批判に終始しているわけではなく、日中関係は今後、二十年間は絶対によくならないだろうとしながら、1960年後半、国境を流れる黒竜江に広がる珍宝島などの島の領

有権をめぐる、中国と旧ソ連が正面から衝突して流血事件まで起こし、それがエスカレートして、一時核戦争にも拡大しかねない緊迫状態が続いた⁽²⁴⁾ ことがあるが、しかし、その厄介な領土問題も 2004 年に 1 滴の血も流さないで平和的に解決した例を引いて、日中関係も必ずよくすることができるはずだと言う。

今後の日中間について考えるとき、最も重要なのは相手に対する姿勢のように思う。以下の、莫邦富氏の姿勢に我々は学ぶべきではないかと思う。

一九七〇年代、黒竜江の畔で銃を持ってパトロールしていた時、私は三〇年後、平和がこの紛争地域に訪れることを想像していなかった。しかし、いまの私は二〇年または三〇年後、日中両国が東アジア経済共同体あるいはアジア連合の実現に向けて一緒に汗を流すことを想像できる。きっとそうなるだろうと信じた。私はその目標実現の長い道のりを埋める礎のひとつになりたい。そして、みなさんにもそうになっていただきたいと思って、本書を今日、読者のあなたの手にお届けしたわけである。⁽²⁵⁾

莫邦富（2005）『日中はなぜわかり合えないのか』は 10 章に分かれている。以下、各章ごとに見ていくことにする。

第一章 サッカーで爆発した反日感情 では 2004 年 7 月 24 日に重慶で行われたアジアカップの日本対タイ戦、7 月 28 日に行われた日本対イラク戦で中国人観客が見せた反日感情の噴出（たとえばタイチームやイランチームには声援を送るが日本チームがボールを触るとブーイングが起こる、又、日本国家斉唱になると、日本人以外の大半の観客が着席し、ブーイングの嵐となるといったこと）についてこうした激しい反日感情を露わにするサッカーファンがいることを認める一方で、中国メディアの冷静な意見も存在したこと（「スポーツはスポーツであり、政治的感情や愛国精神と一緒にすべきではない」⁽²⁶⁾）といった『中国青年報』の意見）に言及し、更に、上記のような反日感情の噴出や日本大使館の車両が壊されたことについて、中国政府の黙認によって起きたのだと言う人に対して次のように反駁して言う。「しかし実際には、一党独裁で何もかも中国共産党の号令一つで事が運ぶと思われる中国政府も、いまやサッカーファンのような国民レベルの反日行動を完全には抑えることができない。力任せで強硬に抑えようとすれば、かえって火に油を注ぐように激しい反発を引き起こし、より大きな爆発につながってしまうおそれがある。」⁽²⁷⁾ 日本人の対中イメージは固定的で既に古いものとなっていることを莫邦富氏は指摘している。

第二章 「反中国」を煽る日本のメディア では日本のメディアや一部日本人の固定

化された中国イメージを問題にしている。その一つは中国の反日感情の根源は「1995 年ごろから始まった中国の愛国教育にある」とするもので、中国人にそれを確かめると、「まったくの誤診だ」と一笑される⁽²⁸⁾。北京魯迅文學院孫教授の次の言辞は中国国民の抗日戦争映画や日本のイメージの最大公約数を物語っていると言う。「私にとっての日本ですか。たしかに子どものころ、抗日戦争の映画をいくつか見ました。戦闘シーンは面白かったし、日本が憎かったです。若いときのこういう感情は、結局、一過性のものに過ぎません。ほかに面白いことができればすぐにそっちに移ってしまうのです。だから、こうした映画から反日教育を受けたというより、ただ男の子として戦争映画が好きだっただけでした。」⁽²⁹⁾

2002 年 9 月、事務所の近くの書店にあった『この厄介な国、中国』『中華思想の罠に嵌った日本』『つけあがるな中国人、うろたえるな日本人』『威圧の中国、日本の卑屈』『やがて中国の崩壊がはじまる』『どこまで中国に喰われ続けるのか』といった類の本について莫邦富氏は「そこには憎しみと呪いしかない」と言う。

2004 年 1 月 26 日付の『毎日新聞』熊本版に掲載された「チャイナリスク」と題する記事では、中国から撤退する企業が多いと指摘しており、記事に引用された家具製造会社（本社福岡）の社長の「（中国）進出企業の 9 割は撤退している。厳しい状況だ」という発言は全くの事実無根のものであり、日本貿易振興機構（ジェトロ）の 2004 年 10 月の発表では、「2003 年日系進出企業の 74.4% が営業黒字を確保。内販つまり中国国内での販売を主とする企業のほうが、輸出型企業より黒字の比率が高いという。損益見込み改善理由として「進出国（地域）市場での売上増加」を挙げた企業は、前年より 10 ポイント以上増加し、59.2% となった。」⁽³⁰⁾ とのことである。『毎日新聞』熊本版の記事を書いた記者の固定観念が問題となる。日本は日清戦争以来の中国への輕侮の念を払拭していないようである。「反中国」を煽る日本のメディアの偏向報道はその表出である。

第三章 多チャンネル時代を迎えた中国 ではインターネットが世論を主導することのある中国の現状について言及している。2004 年 7 月 20 日に、中国インターネット情報センターが発表した「第 14 回中国インターネット発展状況統計報告」によれば、「同年 6 月末の時点で中国のインターネット利用者は 8,700 万人に達して」⁽³¹⁾ いる。

第四章 無視できないインターネット世論 では続けて中国におけるインターネットの大きな影響について述べている。2003 年 9 月に西安で起きた日本人留学生寸劇事件と反日デモはインターネット情報が危うさを秘めている一面を浮き彫りにしている⁽³²⁾ としている。西北大学の文化祭で、日本人の男子留学生 3 人と教師 1 人が寸劇を行い、T シャツに赤いブラジャー姿で背中に「日本♥中国」と書いて、腰に紙コップをつけ、わいせつ

な踊りをしたことに対して、翌朝から中国人学生が留学生に謝罪を求めて抗議し、「留学生が中国を侮辱した札を下げている」という香港紙の誤報がインターネットに流れ、学生が不満を爆発させ、一番多いときは1,000人以上が大学や陝西省政府前でデモ行進するという事態に立ち至ったのであった⁽³³⁾。結果、留学生3人は退学処分、日本人教師1人が解雇された。誤報がインターネットに流れたことが事件を大きくした。もっとも中国のウェブサイトが消費者の立場を純粹に反映している場合もある⁽³⁴⁾から、一概にインターネットが悪であるとはもちろん言えない。

第五章 中国共産党の危機意識 においては「親民性」＝「国民の意向」を尊重せずしては今後の中国共産党の将来はないことを述べている。胡金濤国家主席も「人民」のための権力、情、利益ということを強調し、親民路線を前面に出しているとする。

第六章 中国人から失われた日本への敬意 でははじめに1978年に中国で開催された日本映画週間について言及している。1978年の末に鎖国政策をやめ、改革・開放政策を開始した中国で国民の多くが改革・開放を積極的に支持したのは、日本映画の影響が大きい⁽³⁵⁾と言う。

当時、中国主要都市で上映された栗原小巻の『愛と死』、熊井啓監督の『望郷サンダカン八番娼館』、高倉健、中野良子主演の『君よ憤怒の河を渡れ』、又、山口百恵主演のテレビドラマ『赤い疑惑』などが中国国民に熱狂的に歓迎され、人気を呼んだ⁽³⁶⁾。それらの映画によって、それまで日本人は資本主義のために苦しい生活にあえいでいると信じこんでいた多くの中国国民は近代的日本社会と幸せそうに暮らしている日本人の生活を目の当たりにし、「遅れているのは中国人自身なのではないか」⁽³⁷⁾とショックを受けたのであった。

日本映画を見た、1978年頃、10代の少年少女だった人達が80年代後半に中国人就学生や留学生として、希望に胸をふくらませて日本に大量にやってきた。莫邦富氏は「日中戦争のために、日本人にいい印象をもっていなかった中国人のほとんどが、なぜ80年代に日本と日本人に尊敬のまなざしを注いだのか。日本映画週間などの形で行われていた文化交流が果たした役割は大きい。」⁽³⁸⁾として「文化」の力を高く評価している。

しかし、日本と日本人への「尊敬のまなざし」は90年代半ば以降、急速に失われ⁽³⁹⁾てしまう。中国人の生活水準の向上と市場経済の普及による、中国国民の消費者としての意識の向上に日本企業が気がつかない⁽⁴⁰⁾ことがその原因であると莫邦富氏は言う。「70年代後半から中国で築かれた対日好感度と日本のイメージは、首相らの靖国神社参拝が代表する歴史認識問題によってダウンしたのだろうと一般には思われている、確かにそれは重要な一因だ。しかし、中国国民にとってより近く、より日常的に目にし、より悩まされて

いるのは、靖国神社参拝や戦犯合祀問題ではなく、むしろ日本製品が品質問題を起こした時の日本企業の対応だ。」⁽⁴¹⁾ 問題であるその「日本製品」が広い意味での「問題を起こした時の日本企業の対応」の例として莫邦富氏は「三菱自工事件」を挙げる。「三菱自工事件」とは三菱自工が中国向けに輸出している「パジェロ」のブレーキパイプが破断し、ブレーキが効かなくなって事故に至る事件が頻発したが、三菱自工側にクレームに対する誠意ある回答がなかった、2001年2月12日、三菱自工側がようやく事件に対する記者会見を開いたが、最初、中国の消費者に対する謝罪の言葉はなく、中央電視台の記者の詰問によってようやくカメラの前でおわびの言葉を述べた⁽⁴²⁾、というものである。こうした事件は90年代後半から中国で頻繁に起こり、日本企業への好感度が急速に薄まり、日本企業の神話も綻びが出てしまった。

莫邦富氏はなぜ日本企業がこうした問題を起こしてしまうのかについて次のように言う。「中国に進出した日本企業の多くは、中国の安価な人件費だけに注目している。中国進出を、単純にコストを抑えるための生産現場の海外移転と捉えている。中国を魅力ある市場として見る視点を持っていない。」⁽⁴³⁾ 日本人の古い、固定的な対中イメージがここでも問題となっている。

莫邦富氏は日本企業が起こしたトラブルの例としてもう一つの例を挙げている。「トヨタ「霸道」広告事件」である。「トヨタ「霸道」広告事件」は念願の中国進出を2002年に実現したトヨタが2003年12月4日、中国で出した四輪駆動車「プラド」（中国名“^{パータオ}霸道”）と「ランドクルーザー」（同“陸地巡洋艦”）の広告が「中国を侮辱している」として反発を招いた⁽⁴⁴⁾ 事件のことである。

2002年の時点で一番シェアを握っていたのはドイツのフォルクスワーゲンで、中国との合弁企業である「上海フォルクスワーゲン」と「第一自動車フォルクスワーゲン」が乗用車シェアの半分を占めていた。中国でのトヨタのシェアはわずか0.5%で、トヨタは中国市場の打開に焦燥感を持ち、最短期間で最大限の多くの人に認知されたいところからインパクトのある広告路線を選んだ。著名な映画監督張芸謀氏が広告制作に当たった。“霸道”の走行風景には、中国文化の象徴である獅子に敬礼させたりひれ伏すような格好をさせ、更に日本語で「「横暴」（“霸道”のこと）だ。尊敬せずにはいられない。」という意味のキャッチコピーをつけた。もう一つのランドクルーザーの広告では、ランドクルーザーが高原地帯で中国自動車メーカー“東風”製軍用車に見えるトラックを引っ張る姿が描かれている。これらの広告が11月下旬、雑誌に掲載されると、中国国民の反発を招き、インターネット上で集団抗議の呼びかけが沸き起こった。広告を掲載した雑誌社は12月2日に、即座に謝罪し、トヨタも謝罪の意を表した。以上が事件の全貌である。

莫邦富氏は「霸道」という車のネーミング自体を問題にする。中国語には「横行霸道」という四字熟語があり「横暴な振る舞いをする」という意味である。日本語の「霸道」のように「王道」の反対の意味で書き言葉で使われるのではなく、日常の話し言葉で用いられるのが中国語の「霸道」なのであり、中国国民がその広告を見て「日本は中国に横暴な振る舞いをする気なのか」と思っても仕方がないだろうというのが莫邦富氏の考えのようであり、氏は「霸道」の製造が四川省で2003年9月に始まったときからそのネーミングが「地雷を踏む恐れがある」と関係者に指摘していた⁽⁴⁵⁾。2004年9月にトヨタは「霸道」という車名をとりやめ、新しい中国語車名「プラド」（「普拉多」）に変更したが、当該事件の根底には「日本企業の中国文化への無理解」があると莫邦富氏は言う。

同様の「日本企業の中国文化への無理解」の例として、莫邦富氏は、2003年秋、上海の繁華街淮^{ホワイハイルー}海路にある日系デパートで目にした広告表現を挙げている。

そのデパートのショーウィンドウに開店10周年を祝うために「ありがとう10周年」と日本語で大きく書かれ、「ありがとう」の下に中国語で「謝謝」と小さく添えられていた。氏は言う。「この店の繁盛を支えているのは中国人消費者のはずだ。中国人消費者に謝意を表すならば、なぜ中国語でストレートに表現しないのか、と疑問に思った。」「消費者に感謝の意を表すならば、まずは中国人消費者に気持ちを伝えるべきだ。それなのになぜ、中国語の「謝謝」を前面に出さないのか、私には理解できない。」⁽⁴⁶⁾ 他の日系企業でも次のような事例があると言う。中国人社員に対する教育として作られた社内の壁新聞が日本語で書かれたもので、千人もいる中国人社員のほとんどが日本語を理解していないのにそれはおかしいのではないかと指摘すると、その企業は一週間後、壁新聞を全部、中国語に直したそうである。それはまだましな日系企業で、上海のある日系デパートにはある種の横柄さすら感じた⁽⁴⁷⁾と言う。

又、上海のある牛丼店を取材しようとして取りやめた経緯について次のように氏は述べている。メニューの訳名についてチキンのどんぶりを「鶏錦飯」、鶏肉と牛肉両方を盛り込んだ弁当を「双宝飯」と訳しているのは「中国人の美意識にあった漢字を上手に当てはめている」が、味噌汁と茶碗蒸しは「味噌湯」と「茶碗蒸」でこれでは「初めてこの店を訪れる中国人消費者は、これらのメニューを読んでもおそらく意味がわからないだろう」⁽⁴⁸⁾と言う。氏は結論として次のように述べている。「中国でビジネスをしているのに、その国の文化と消費者の言語習慣を尊重しようとする意識がどうも中途半端だと指摘せざるを得ない。むしろ、意識のどこかにその会社のエゴと傲慢さが残っているとうすうす感じてしまうのだ。その牛丼店の日本人幹部の連絡先を記した紙を折りたたんでポケットにしまい、取材はとりあえずおあずけにした。努力が中途半端な会社はとりあげたくない。

それが私なりの美意識だからである。」⁽⁴⁹⁾

第七章 人的パイプが老朽化した日中関係 では日中間の相互理解に欠かせぬ人的パイプが細くなり老朽化していることを指摘している。莫邦富氏は 1980 年から 5 年間続いたかつての「大平学校」を高く評価する。1979 年 12 月、中国を訪問した大平正芳首相の発案で、1980 年 8 月に日本語研修センター（「中国日本語教師培训班」）を北京語言学院内に設け、5 年間で 160 校以上の大学から 594 人もの日本語教師がそこで日本語研修を受けた。⁽⁵⁰⁾ この「大平学校」（研修を受けた人間も中国の政府関係者もそう呼んでいる）は日本語教育の人材養成だけでなく日本にとっては知日派を大規模かつ効果的に育成したプロジェクトであった。「2003 年度までの日本の対中国 ODA（政府開発援助）累計供与額は、全体の九割を占める円借款が三兆四百七十一億円で、ほかに返済不要な無償資金協力と専門家派遣などの技術協力がそれぞれ一千四百億円を超えた。大平学校はそのうちのわずか十億円であった。コスト対パフォーマンスの効果を考えると、まさに最高と言えるだろう。」⁽⁵¹⁾ 現在ではそうした「大平学校」のようなものが存在しないと言う。莫邦富氏は今後の企業市民活動（地元のよき企業市民となるべく、汗をかくのを惜しまず努力する企業活動）に期待している。

第八章 さらに揺れ動く中国 では中国国民は経済発展とともに共産党の言う通りに動くのではなく、自らの価値判断に基づいて行動するようになりつつある⁽⁵²⁾ とする。

第九章 日本を知らない「対日新思考」論者 では「対日新思考」論者の日本の現状に対する認識のなさを指摘している。

第十章 東アジア経済共同体時代へ では日中両国がアジアの覇を争う一国的な狭い目標を捨て、アジア共同体を築くという雄大な夢を求めるべきではないか⁽⁵³⁾ とする。

以上、見てきたように莫邦富氏の『日中はなぜわかり合えないのか』は日中間の問題の現状を主として経済、文化の観点から考察し、未来に光を見出そうとする、現時点で、日本と中国を知るための最良の書であると言える。

四、結語

2005 年 5 月の連休あと、「反日の嵐」が吹き荒れた(?)直後の中国へ行った。私の本務校と協定校である鎮江市の江蘇大学を訪問し、日本語教育や他の交流について意見を交わした。「反日の嵐」はどこにもなかった。日本人であるために不愉快な思いも全然しなかった。翻って、なぜ「反日」は起こったのか。本稿を読んでいただければその一端が理解できるであろう。日本人は日清戦争以来の中国への軽侮の念を払拭しなければならないのではないか。そのためにはお互いの歴史、文化をよく知ることである。言語はその理解の根

底に存在するものであろう。本稿で見たヒステリックな中国批判を展開する者は多くが中国語や中国の良質な部分を全く理解しない人達である。「相互理解」という言葉も手垢のついた言葉となってしまったが今、必要なのは相互の言語、文化の理解に基づく将来を見据えた両国関係であろう。莫邦富氏の本はそのことを教えてくれている。

〔注〕

- (1) 古森義久 (2003) p. 251
- (2) 同 (1) 書 p. 16
- (3) 同 (1) 書 p. 26
- (4) 同 (1) 書 pp. 31-32
- (5) 同 (1) 書 p. 108
- (6) 同 (1) 書 p. 114
- (7) 同 (1) 書 p. 160
- (8) 古森義久 (2005) p. 5
- (9) 同 (8) 書 p. 24
- (10) 同 (8) 書 p. 51
- (11) 同 (8) 書 p. 47
- (12) 同 (8) 書 p. 53
- (13) 杉山徹宗 (H.16) p. 4
- (14) 同 (13) 書 p. 60
- (15) 同 (13) 書 p. 252
- (16) 同 (13) 書 p. 257
- (17) 同 (13) 書 pp. 283-284
- (18) 金文学 (H.17) p. 17
- (19) 同 (18) 書 p. 45
- (20) 同 (18) 書 p. 83
- (21) 同 (18) 書 p. 132
- (22) 同 (18) 書 p. 170
- (23) 莫邦富 (2005) p. 8
- (24) 同 (23) 書 p. 9
- (25) 同 (23) 書 p. 11
- (26) 同 (23) 書 p. 19
- (27) 同 (23) 書 pp. 20-21
- (28) 同 (23) 書 p. 26
- (29) 同 (23) 書 pp. 26-27
- (30) 同 (23) 書 p. 40
- (31) 同 (23) 書 p. 44

- (32) 同 (23) 書 p. 70
- (33) 同 (23) 書 p. 70
- (34) 同 (23) 書 p. 75
- (35) 同 (23) 書 pp. 92－93
- (36) 同 (23) 書 pp. 93－94
- (37) 同 (23) 書 p. 94
- (38) 同 (23) 書 p. 97
- (39) 同 (23) 書 p. 99
- (40) 同 (23) 書 p. 100
- (41) 同 (23) 書 p. 100
- (42) 同 (23) 書 pp. 100－102
- (43) 同 (23) 書 p. 103
- (44) 同 (23) 書 p. 104
- (45) 同 (23) 書 p. 110
- (46) 同 (23) 書 p. 114
- (47) 同 (23) 書 p. 115
- (48) 同 (23) 書 p. 117
- (49) 同 (23) 書 p. 117－118
- (50) 同 (23) 書 p. 121
- (51) 同 (23) 書 p. 124
- (52) 同 (23) 書 p. 162
- (53) 同 (23) 書 p. 212

〔引用・参考文献〕

- (1) 古森義久 (2003) 『日中再考』扶桑社文庫
- (2) 古森義久 (2005) 『北京報道七〇〇〇日 なぜ日中再考なのか』扶桑社文庫
- (3) 杉山徹宗 (H.16) 『侵略と殺戮 真実の中国 4000 年史』祥伝社黄金文庫
- (4) 金文学 (H.17) 『中国人民に告ぐ!』祥伝社文庫
- (5) 莫邦富 (2005) 『日中はなぜわかり合えないのか』平凡社新書